

主要登場人物

ラインハルト・フォン・ローエングラム

(Reinhard Herzog von Rheingram)

金髪と蒼氷色の瞳を持つ貴公子。戦争の天才。銀河英雄伝説の主人公の一人。元帥。ローエングラム公爵。

ジークフリート・キルヒアイス

(Siegfried Kirch)

ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感じの良い青い目の長身の若者。上級大将。ガイェスブルグでアンスバッハによるラインハルト暗殺を阻止した際に重傷を負うが、その後恢復し、ラインハルトの麾下に戻る。上級大将。

アンネローゼ・フォン・グリュネワルト

(Annerose Graf von Grünwald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリュネワルト伯爵夫人となる。そのフリードリヒ四世の死後、ラインハルトたちの許へ戻るが、その後、フロイデンへと隠棲する。

ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ

(Hildegard von Mariendorf/Frau ein Mariendorf)

マリンドルフ伯爵家の一人娘。伯爵令嬢マリンドルフ。通称ヒルダ。短くした、くすんだ金色の髪とブルー・グリーンの生き生きした瞳の、美貌の少年を思わせる女性。ラインハルトの一歳年下の二二歳。リップシュタット戦役に先立ってラインハルト陣営への協力を申し入れ、ラインハルトの知遇を得

る。帝国宰相首席秘書官として、ラインハルトを補佐するとともに、ラインハルトのよき相談相手となる。

ヤン・ウェンリー

(Yang Wen-li)

同盟軍大将。イゼルローン要塞司令官・兼・駐留艦隊司令官。歴史を学ぶ目的で同盟軍士官学校に入り、そのまま意に反する形で軍人となる。「エル・ファシル」で多くの民間人を救い、若き英雄となる。

フレデリカ・グリーンヒル

(Frederica Geithil)

同盟軍大尉。知性と美貌を兼ね備えた、ヤンの副官。

ドワイト・グリーンヒル

(Dwight Geithil)

同盟軍大将。統帥本部次長。アムリッツアの敗戦の責任を取り、査閲部長に左遷される。フレデリカの父。(どっ)して、そつ言つ偉い人の家族がエル・ファシルなどという辺境に住んでいたんだろ(どっ)か。後、救国軍事会議によるクーデターを主導する。なんでリンチを信用したのか、その理由を知りたいと思つて。

アーサー・リンチ

(Arthur Lynch)

元同盟軍少将。元、ヤンの上官。エル・ファシルで見方や民間人を捨てて逃走を図って帝国軍の捕虜となる。グリーンヒル大将の後背。ラインハルトの命を受けて、同盟に潜入するが、原作に於ける彼の描写や行動には多くの疑問がある。

ルグランジュ

(Le Grandje)

同盟軍中將。第一艦隊司令官。やはりファーストネームももらえない、その他大勢キャラクター扱いだが、彼の麾下の第一艦隊は、そのほとんどが最期までヤンに降伏せず、戦い抜いている。部下の信望を得ていたことも確かで、自身も最期までかなり互角に近い形で戦っているのは、ヤンと戦った他の将帥たちに劣らないだけの能力の所有者だったことを示すものと見て良いと思つて。

ウランフ

(Uranf)

同盟軍中將。第一〇艦隊司令官。アムリッツアに先立つ、惑星リユーゲンでの戦いでビットェンフェルトと戦い、敗れる。原作ではそこで戦死しているが、アレクサンドル・ニコロツク

アレクサンドル・ニコロツク

(Alexander Nicolov)

同盟軍中將。第五艦隊司令官。アムリッツア後、大將となり、同盟軍艦隊司令長官となる。同盟軍の宿将。原作黎明編ではもつと怖いオッサンかと思つていたが、その後、案外に話の分かる老師という感じの人であることが分かった。

エフ・トリューニット

(Euf Trünit)

同盟最凶の政治家。現時点ではそれ以上のコメントなし。

アントン・ヒルマー・フォン・シャフト

(Anton Himmer von Schaf)

帝国軍科学技術総監。技術大将。要塞の超光速異動技術を考案し、ラインハルトに提案する。ピア・ホルの親父を思わせる容貌。

本編オリジナルキャラクター紹介

マルガレータ・テレーゼ・フォン・ヘルクスハイマー

OVA『奪還者』に登場した、ヘルクスハイマー伯爵の娘。気丈で頭の良い、自分を「妾^{めかけ}」と呼ぶ古風な話し方をする一〇歳の少女として描かれていた。ラインハルトをして多分初めてキルヒアイスを取られるのではないかと恐れさせた人物。本編では、『奪還者』後、同盟へ亡命した彼女を描くが、亡命後、グレーチェン(グレートヒエン)・テレサ・ヘルクスハイム(Gerchen Theresa Harkheim)を名乗るようになる(ことにした)。紫水晶の瞳と淡い金髪の所有者。オリジナル・キャラクターとは言い難いが、亡命後の設定その他はすべてオリジナルになっているので、ここで紹介している。ミドルネームのテレーゼも、本編で勝手に付けたもの。



ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリンゲ

(Wenzel Heinrich von Bendling) 同じくOVA『奪還者』で、最後にマルガレータを同盟へ亡命させる上での後見人として、彼女に同行した、伯爵家の三男坊。果たしてうまく亡命し、マルガレータをちゃんと同盟の市民として生きていけるようにできたのかどうか疑問もあるが、本編では

それなりに有能で、マルガレータを自分の被保護者として大切にしている人物として捉えることにした。帝国軍統帥本部情報部付き少佐。ファースト・ネームは本編で勝手に与えた。でないと、マルガレータ(グレーチェン)が彼を呼ぶ時に面倒なので、



「ヴェンツェル」の由来は、分かる人には分かるはず

ティフリー・ブランドン

(Tiffany Brandon)

同盟軍士官学校でのグレーチェンの同期生。クルーカットの髪型、頑丈な体つきの生真面目な少年。士官学校出は、グレーチェンと首席を争う。モデルとしては、その昔、米国幼年学校での悲劇を描いた映画の登場人物たちがそれに当たる。グレーチェンとも浅からぬ縁を持つことになるが……

イェーラン・アルノルドシエン

(Eran Arnoldson)

同盟軍大佐。惑星テルヌーゼン衛星軌道根拠地司令官。狂信的な帝国嫌い、「良い帝国人は死んだ帝国人だけだ」が口癖。帝国からの亡命者総てをスパイだと信じている。

フランツペーター・ヨハネス・パウアーシュミット

(Franz Peter Johannes Bauer schmitt)

帝国宰相府付き宿直医。^{コウゲネクラシックハイト} 膠^{カウゲネ}原^{クラシック}病^{ハイト}の専門研究者としての実績もあり、同時に臨床医としても優秀な経歴を持った若い医師。苗字がこともあろうにパウアーシュミットであるのは、筆者の趣味に属する。